全消協 全消協ニュース

全国消防職員協議会発行／編集責任者 門間孝一／東京都千代田区六番町1 自治労会館／☎（03）3263-0271
ホームページアドレス／http://zensyokyo.jp/

第40回
研究集会報告
6.13～14
in 長崎

長崎の地で原点回帰

誰かに頼るのではなく、自ら組織強化を

2012年6月13日から14日、長崎県長崎市「長崎市民会館文化ホール」を主会場に、第40回全国消防職員研究集会が開催され、全国から375人の仲間が参加した。この長崎は全国消防職員協議会が誕生した、いわば聖地にあたる。

冒頭、迫大助会長から「我々は歴史深い長崎の地で原点回帰し、権利の主張だけでなく、職務上の義務を果たすことを改めて確認したい。団結権回復は目前に迫る課題だが、私が現役のうちに実現したい。多くの有識者と話す機会があったが、ある人は当初、消防職員に団結権は必要ないと言っていた。しかし、相次ぐヘリコプター事故により考えを改め、自分たちで自分たちの身の安全を考えるべきだと言ってくれるようになった。国に対しては、民主党PTやあり方検討会への参加を含め、様々な対応をしてきた。しかし、我々は人に頼るのではなく、まず、自らの組織を強化していく必要がある」と力強いあいさつがあった。

来賓としては、自治労中央本部から澤田副委員長、長崎県本部から小島委員長、民主党から「あいはらくみこ」参院議員、長崎県連から陣内副代表らが駆けつけた。また、長崎市長代理として出席した長崎市消防局の藤原幸司中央消防署長からは「東日本大震災では消防職員、団員にも多くの被災者が出た。長崎大水害からも30年経過したが、それを風化させることなく、防災に力を入れていく。皆様の職務への従事に感謝している。二日間、実りある集会になること、そして消防職員同士の連携がますます深まることを祈念する」と激励のあいさつを受けた。

（二面につづく）

●全消協ゆかりの地、長崎の会場は熱気につつまれた

●基調を提起する迫会長

●会場に駆けつけたあいはらくみこ参議院議員

半鐘のこだま

先日、県内の某未組織消防本部の管理者である村長の表敬訪問に行く機会があった。自治体のトップであり、全国町村会に所属しているだろうから消防職員の団結権、協約締結権について真っ向から反論されるのではないかと多少不安を抱きながらの訪問だったが、我々から今回の訪問の目的を説明すると、村長から次のような言葉があった。「消防職員協議会の名前は初めて聞くし、どんな組織なのか知らなかったが、私は消防職員も労働者であり、消防職場にもこのような組織は必要だと思っている。むしろ、なぜ沖縄県内ほとんどの消防に組織が存在して、我が村の消防に組織が無いのか聞きたいくらいだ。組織をつくるのは当事者たる消防職員であり、私が作るわけでもなく、反対する立場でもない。肝心なのは我が村の消防職員がどう考えているかだ」。

この村長の言葉を発端にお互いの緊張が解け、和やかに話すことができた。

全消協と自治労はこれまで、消防職員の団結権に関して長い年月をかけて様々な活動をしてきた。その積み重ねが今回の公務員制度改革であり、その影響なのか、各首長や消防長の我々に対する対応の変化を肌で感じた次第である。この時代の変化をしっかりと受け止め、組織拡大のチャンスを活かすためにも全国の仲間が勇気をもって行動し、多くの組織を立ち上げて欲しいと切に願う。今年の七夕の短冊には、そんな願いを書いてみた。

島 武志（九州ブロック幹事）

第40回全国消防職員研究集会報告

献花に込めた平和への願い
～平和祈念行動を実施

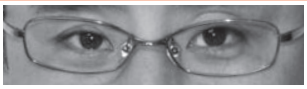
特別講演Ⅰでは「長崎原爆と福島原発事故」をテーマに、川野浩一原水爆禁止日本国民会議議長から、自らの被爆体験に基づき、核と人類は共存できないとの訴えを受けた。その後、講演にこたえた平和祈念行動として、参加者全員で、長崎平和公園にて献花を行った。

また特別講演Ⅱでは「２００４年選手たちが学んだこと～１０３日間の闘い～」と題して、松原徹日本プロ野球選手会事務局長からプロ野球選手会の取り組みについての報告があった。

●平和にむけた黙祷を行う参加者

●プロ野球選手会松原事務局長

遠田編集長の視点



日本プロ野球選手会講演「２００４年選手たちが学んだこと～１０３日間の闘い～」を見て

「ストライキを通して、ますますプロ野球が好きになった」。プロ野球選手会が２００４年のストライキ中に開催した集会で実際にあった、ある女性ファンの言葉だという。私はこの発言に衝撃をおぼえた。「選手の皆さんが、本当に野球が好きなこともわかりました。私は、12球団すべてが好きですが、今回13番目の球団である選手会の大ファンになりました。これからも頑張ってください」ストライキに世論も割れる中、そんな激励を受けたそうだ。プロ野球選手会が初めて市民権を得て、市民のコンセンサスを得た瞬間ではなかったか。ＷＢＣ参加問題で折しも話題となっているプロ野球選手会だが、講演をいただいた松原事務局長の熱い語りにも感謝したい。そして、我々消防職員も市民権を得られるように、日頃から邁進しよう！

第Ⅰ分科会　組織強化・拡大

第Ⅰ分科会は「組織強化・拡大」をテーマに、山下晃自治労本部公務員制度改革対策室副部長から「公務員制度改革をめぐる情勢について」の講義を受け、続いて「福岡県消防行政研究会の取り組み」について、村上直樹福岡県消防行政研究会事務局長から組織強化活動報告を受けた。

また、「消防職場の組織化にむけた取り組み」について渡辺真二大分県消協会長の報告、次に最近結成した木古内消協の澤口秀喜会長と大竹市消協の村本誠会長から、結成に至るまでの経過報告を受けた。喫緊の課題である公務員制度改革を見据え、労働組合へ移行するための組織強化対策の必要性と、さらに全消協を発展させるためにいかに多くの仲間を増やすかについて熱い議論が繰り広げられた。

第Ⅱ分科会　賃金・労働条件の改善のために

第Ⅱ分科会では将来の労働組合結成を見据え、初の試みとして「要求書の作成」を行い団体交渉のポイントを学習した。要求書は根拠と説得力に留意し、簡潔に作成する、交渉はしっかりと理論武装をしなければたたかえない、模擬団体交渉で交渉力を身につけることが大切などの助言を受けた。

第Ⅲ分科会　救急医療体制の課題

第Ⅲ分科会では「救急活動に関わる法律問題」をテーマに、細川潔自治労顧問弁護士から、実例をあげ、法律の立場から訴訟に発展する場合のポイントなどについて講演を受けた。その後、救急現場で直面した様々な問題などについてグループ討議し、救急現場における短時間での信頼関係の構築、訴訟対策としての記録の重要性について確認した。

第Ⅳ分科会　労働安全衛生～快適な職場づくり

第Ⅳ分科会は「労働安全衛生～快適な職場づくり」をテーマに、福岡県大牟田市企画総務部職員厚生課安全衛生担当の渡辺裕晃さんから「リスクアセスメント」を学んだ。リスクアセスメントとは、職場に存在する安全や健康を害するものを自分達で見つけて、自分達で対策することであり、災害を引き起こすものは何かについて、みんなで考え、みんなで対策することを学び、班ごとにそれぞれの職場環境の状況を盛り込んだ改善策をグループ討議した。

第Ⅴ分科会　男女平等参画・国際連帯活動

第Ⅴ分科会では、ＰＳＩ－ＪＣ佐藤克彦事務局長から『消防とＰＳＩ』と題し、全消協がＰＳＩに加盟する意義や国際連帯活動に関わる重要性について講演を受け、国際連帯活動の推進を参加者とともに考えた。

高橋睦子連合副事務局長からは『男女平等社会の実現』に向けた提起を受け、男性参加者・女性参加者がともに職場での男女平等参画に向けた課題を出し合い、解決策を各グループで発表した。最後に高橋さんは「このような取り組みが男女双方の仕事と生活の両立（ワークライフバランス）につながる」と締めくくった。

●模擬団交では「当局役の人間性を疑いそうになった」とアンケートに書かれるほどの迫真の演技が見られた

第3回
リーダーセミナー報告

「情けは人のためならず」リーダーの資質を学んだ2日間

3月8日から9日、東京JALシティ田町で、全消協第3回リーダーセミナーを開催、全国から50人の仲間が参加した。リーダーセミナーは単協の会長、事務局長などの執行部を対象に、運動のけん引役となるべき人材の育成を目的としている。

●参加者全員で団結を固く誓った

セミナーは「団結権付与後の労働組合としての組織活動について」と「職場の団結体（労働組合）づくりに向けて」の2つをテーマに行われ、各講演の後、グループに分かれて活発な意見交換を行った。

2日間講師を務めた連合アドバイザーの田島恵一さんは「人を助ければ必ず自分に帰ってくる。協議会会員や組合員、とくに執行部の役員になることは大変さもあるが、活動を通じて広がる世界の楽しさも味わえ、自分自身の成長にもつながる。また、自分ひとりくらい参加しなくてもと思いがちだが、誰もが参加する組織だからこそ、労使対等の関係を築くことができる」と訴えた。

グループ討論では、まず山積する課題や悩みが共有化され、その後、問題解決にむけた先進的な取り組み成果や、今後の活動のヒントなどが発表された。

1日目の夜は全体交流会があり、講義・グループディスカッションとは違った連帯感が生まれ、有意義な2日間となった。会場のJALシティからは、飲み放題の焼酎が底を突いたのは、ホテル始まって以来だと驚かれた。

全消協ユース部発足!! ～初の幹事会を開催

3月10日、自治労会館において、第1回ユース部幹事会が開催された。冒頭、互選により、代表に古川智広さん（近畿）、副代表には岡本大介さん（四国）、樺澤隼人さん（東北）が選出された。その後、今後の活動方針について議論を行い、ユース世代を対象としたユース部主催による学習会の定期開催や、ユース世代の協議会への参加促進を目的としたアンケートの実施について意見が出された。

アンケートについてはユース世代特有の問題を洗い出すことを意識しながら、その内容について第2回ユース部幹事会までの課題とした。次年度、ユース世代の全会員を対象に実施する予定。

ユース便り 【第40回研究集会に出席して】

●古川智広ユース部代表

ユース部代表の大役を任じられました、古川と申します。よろしくお願いします。ユース部幹事会として、今回はじめて第40回全国消防職員研究集会に参加しました。前日の打ち合わせや資料準備を通じ、集会の開催には多くの労力、時間、費用を要していることを認識し、全消協活動に対する決意を新たにしました。

また、研究集会で多くの会員と知り合う機会を持ち、集会におけるテーマだけではなく、幅広い意見や考え方を聞くことができ、大変有意義な場となりました。

全国における単協の組織強化や各単協が抱える課題解決にも触れ、自らの職場環境改善へのアプローチも再確認できたことは大きな収穫です。

今回の研究集会におけるユース世代の出席率は全体の約30％でした。今後はさらなる出席率の向上、また意見交換のできる環境づくりも進めたいと思います。

そのためには会員皆さんの力が必要です。

ユース世代の活性化、次世代におけるリーダー育成にむけ、私たちユース部も精一杯活動しますので、お力添えよろしくお願いします。

●長崎でグループ討論に参加する岡本ユース部副代表

千葉県・松戸市消防職員協議会

パワハラ訴訟完全勝利！！

全国消防職員協議会の皆様、こんにちは。私たちは、松戸市消防職員協議会と申します。千葉県内で2番目、関東甲で8番目の単協として2008年2月に結成し、2009年1月に全消協に加盟しました。

松戸市は、千葉県北西部に位置し、東京都に隣接しているため、東京のベッドタウンとして発展しました。消防局は、職員数501人（1局10署）で人口約48万人の生命、財産を守っています。

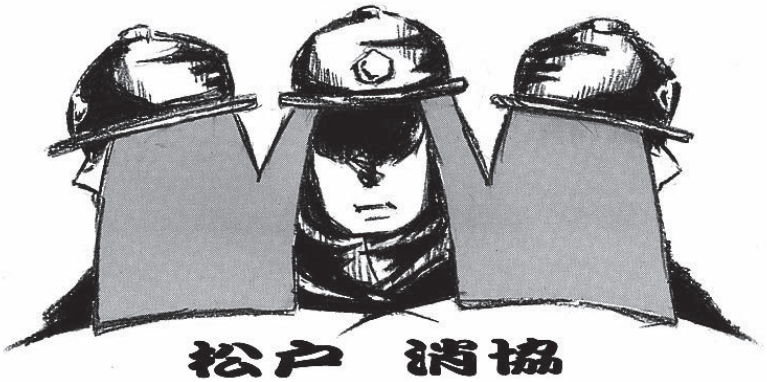
階級制度を強く意識した組織で行われたことは、通勤時の服装の強制（スーツ、ネクタイ着用）からはじまり、組織的なパワーハラスメントや、職員をふるいにかける（退職させる）ための集中訓練に発展し、大量の中途退職者を出しました。この状況に歯止めをかけるため、私たちは、松戸市消防職員協議会を結成しました。

パワハラ訴訟では、全消協・自治労の皆様には、ご協力、ご支援をいただき、本当にありがとうございました。お蔭をもちまして勝利することができました。

新規採用職員集中訓練等の訓練も姿を変え、通勤時のスーツ、ネクタイ姿の縛りも解け、当局は、職員の意見を聞く姿勢が見られるようになりました。

局長は、私たちの実行したことに間違いは無く、松戸消防を良くするためのものであったと理解を示してくれました。

最後に、松戸市消防職員一同が団結して、松戸市民の安全のために全力を尽くすことができるように、団結権をイメージしてイラストを作成しました。ぜひ、ご覧ください。



いちゃりばちょうで

※「いちゃりばちょうで」とは、沖縄の言葉で「一度会ったらみな兄弟」という意味です。

広島県・大竹市消防職員協議会

消防職員の皆さん、手をつないでがんばろう

全国消防職員協議会の皆様、こんにちは。

私たちは、2011年11月16日に県内3番目の単協として、全消協の仲間入りをさせて頂きました大竹市消防職員協議会と申します。

大竹市は広島県の西部県境に位置する臨海工業都市で、1署1本部職員数45人で人口約2万9千人の住民の生命・財産を守っています。

小さい街であるが故に一人ひとりの声は届きやすいと思われる反面、職場環境は閉鎖的で、意見がいつの間にか消滅していたり、与えられていることでそれを当たり前だと認識している状態でした。外部との情報交換や学習会に参加していくと、同じ問題を抱えている仲間がいることや、これまで違和感がなかったことが「これはおかしい」と意識の変化を実感するようになりました。

東日本大震災では、年齢・性別・国籍などすべてを区分することなく手をつないでみんなが団結しました。私たちも今、手をつないでおかないと団結できないなという思いから、27人の仲間で結成しました。

結成にあたり、ご尽力頂きました皆様に感謝申し上げるとともに、団結することで住民への消防サービス反映へ繋がると確信しています。

まだできて間もないチームですが、よりよい明るい消防職場をめざし、頑張っていきます。よろしくお願い致します。

会長　村本　誠